

2022年10月15日

第27回加藤周一文庫公開講読会

『羊の歌』「仏文教室」(後半)

立命館大学客員協力研究員

猪原 透

【第5段落】仏文研究室の人びと(2)——中島健蔵

①私はまた中島講師の人柄を好んでいた。決して陰険な策をめぐらさない人であり、私のような青二才を相手にしても、対等に接して、飾らず、かくさず、忽ちうちとけた空気をつくりだすことのできる人であった。②ありとあらゆることに興味をもち、現代音楽に凝るかと思えば、自動自転車の発動機を組み立て、天下国家を語るかと思えば、生理学会の最近の動向を論じ、大学ではフランス象徴主義を講じながら、数限りない委員会や組織に活躍し、現れたと見るまに消え、消えたかと思ううちに悠々と談じていて、たえず東京中を駆けめぐりながら疲れを知らぬようにみえた。しかしそのどれ一つとして、一身上の利益を目的としたものではなかった。③何をしているのか、よくわからなかったが、何故そうしているのかは、実によくわかった。私はその忙しさに驚き呆れ、その心の——何といたらよいか、一種の質に、共感を覚えていた。

①「私はまた中島講師の人柄を好んでいた……」

・中島健蔵(1903-1979)は、フランス文学者・文芸評論家。1934年から東京帝国大学仏文科講師。当時から文壇で活躍。戦後に日中文化交流協会の理事長となり、『羊の歌』刊行後に加藤を中国へと連れていく。中島への追悼文では「私心私欲なく、党利党略なく、多方面に活躍した中島さんのなかには、いつも一人の詩人が住んでいたのだろう」と述べている¹。

・ただし当時、加藤とどのような交流があったかはよくわからない。太平洋戦争の開戦後まもなく中島は徴用され、マレー・シンガポールに送られている。

②「ありとあらゆることに興味をもち……」

・中島はクラシック音楽に造詣が深く、当時からレコードの収集家として知られていた²。1982年から2009年までは中島健蔵音楽賞が存在したほど。

・30年代半ば～40年代までに中島が何らかのかかわりを持っていた団体は、昭和研究会、国策研究座談会、農山村文化協会講演会、文芸中央会、文芸者会、日本ペン倶楽部、日本編集者会、東亜新秩序研究会など。こうした多くの組織を通して中島は戦争へと向かう日本社会に深く関わったが、(時局に便乗した人々とは異なり)一身上の利益を目的としない純粋さに加藤は共感。

¹ 加藤周一「誄」鷲巣力編『称えることば 悼むことば』(西田書店、2019年)107頁。

² 中村真一郎『私の履歴書』(ふらんす堂、1997年)79-80頁。

- ③「何をしているのか、よくわからなかったが、何故そうしているのかは……」
・前パラグラフの辰野隆（何を言っているのかはよくわかるが、その真意はうかがい知れない）とは対照的な印象。

【第6段落-1】

①しかし私がいちばん強い影響を受けたのは、おそらく、戦争中の日本国に天から降ってきたような渡辺一夫助教授からであったにちがいない。②渡辺先生は、軍国主義的な周囲に反発して、遠いフランスに精神的な逃避の場をもとめていたのではない。そうするためには、おそらくフランスの文化をあまりによく知りすぎていたし、また日本の社会にあまりに深く係っていた。日本の社会の、そのみにくさの一切のさらけ出された中で、生きながら、同時にそのことの意味を、より大きな世界と歴史のなかで、見定めようとしていたのであり、自分自身と周囲を、内側からと同時に外側から、③「天狼星の高みから」さえも、眺めようとしていたのであろう。それはほとんど幕末の先覚者たちに似ていた。攘夷の不可能を見抜き、鎖国の時代錯誤を熟知し、わが国の「後れ」を単に技術の面だけではなく、伝統的な教育とももの考え方そのものに認めて、その淵源を日本国の歴史のなかにもとめ……④もしその抜くべからざる精神が、私たちの側にあると、絶えず「狂気」を「狂気」とよび、「時代錯誤」を「時代錯誤」とよびつづけるということがなかったら、果して私が、ながいいくさの間を通して、とにかく正気を保ちつづけることができたかどうか、大いに疑わしい。日本国の状況を外から眺めようとしても、私は実際に国の外へ出たことがなかったし、外の世界についての知識にも、乏しかった。⑥その頃ようやく第一次大戦以後のフランスの作家を読み、両大戦間の《ユーロップ》や《N・R・F》を研究室から借り出して、片端から読んでいたという程度のことにはすぎない。しかし渡辺先生にとって、私たちが昼ま読んでいた現代文学の本などは、一六世紀研究に疲れて休まれるときの、一晩のたのしみにすぎなかったろう。⑦その「一六世紀」は、綿密周到に調べられていただけではない。まさにそれは、宗教戦争の時代であり、異端裁判の時代であり、観念体系への傾倒が「狂気」にちかづいた時代であって、従ってまた何人かのユマニストたちが「寛容」を説いてやまなかった時代でもあった。すなわち、遠い異国の過去であったばかりでなく、また日本と日本をとりまく世界の現代でもあった。⑧資料の周到な操作を通して過去の事実に向きあうとすればするほど、過去のなかに現在があらわれ、また同時に、現在のなかに過去が見えてくるということを、渡辺先生は身をもって、私たちに示していた。⑨このおそろしく聡明で敏感な学者は、幕末の志士に似たその面影を、常に味深い皮肉と逆説のかげにかくし、露骨な表現は、文明ではない、といったようにみえた。ラシーヌの舞台では、主人公の死が報じられるが、血の流されることはない。

- ①「しかし私がいちばん強い影響を受けたのは……」
・渡辺一夫（1901-1975）は、ルネサンス期フランス文学の研究者。フランス古語に通じ、エラスムスやラブレールなどユマニストの研究・翻訳で大きな業績をあげた。

・「天から降ってきた」と形容されるほど渡辺は稀な存在。「私が個人的に知っていた人物で、戦争の先行きについていろいろな意見を聞くことができたのは、たぶん二人しかいないと思う。一人は、仏文科の渡辺一夫先生です。もう一人は私のおじです」³

②「渡辺先生は、軍国主義的な周囲に反発して……」

・片山敏彦（「戯画」の章）との対比が意識されているのかもしれない。渡辺は3年にわたってフランスに住み（31-33年）、「奇麗ごとではすまない」側面も知っていた。

・戦時下の日本に対する妥協のない批判者でありながら、渡辺は永井荷風のように他者との接触を拒絶せず、知人や学生との個人的な接触を、拒絶するどころか、かえって尊重するものであった」という⁴。

・渡辺は日本と深く関わって生き、その意義を「より大きな世界と歴史のなかで」見定めた。加藤は、渡辺が戦争批判を貫けた理由を次のように推測している。「日本の中では極端な孤立ですが、しかし世界では、ことに欧米では、少なくとも知識層のなかでは圧倒的な多数派です。〔中略〕日本の外に一步出れば自分たちの言っていることは多数意見なんだということを知っていたのです。それが圧倒的な少数意見なのは日本の中だけの話だと」⁵

③「天狼星の高みから……」

・渡辺は加藤『ある晴れた日に』（1950年）に寄せた序文で、我々は「^{シリウス}狼星の高みから見ればいずれもとるに足らぬ小事件」のために苦悩するが、「この不潔で小さな地球に住んでいる」以上はその苦悩を少しでも減らそうと願うことこそ生きる道ではないか、と述べている。加藤自身も「コンディヤックの感覚論」（1948年）で、「〔18世紀フランスで〕己が住む時代と社会を一瞬の下に収めようとした人々は、己自身を離れて己自身を眺めようと試み、ペルシア人や天狼星から人を招いてそのいう処を聞いたのである。ペルシア人の手紙〔モンテスキューの著作〕やミクロメガス〔ヴォルテールの著作〕の観察が必要であった」と記載⁶。

④「もしその抜くべからざる精神が、私たちの側にあって……」

・渡辺の自宅は本郷にあり、「戦争の嫌いな学生を集めて話をしたりしておられた。後にはそういう集まりにも参加できた」⁷。加藤は渡辺との交際を通して自分以外にも戦争に徹底して批判的な者がいることを知り、そのために自分の考えを変えずに済んだと認識。

³ 加藤周一『私にとっての20世紀』（岩波書店、2000年）88-89頁。

⁴ 加藤周一「日本文学史序説 下」『加藤周一著作集』第5巻（平凡社、1980年）530頁。

⁵ 加藤周一（対談者・徐京植）「教養に何ができるか」『「羊の歌」余聞』（筑摩書房、2011年）264-265頁。

⁶ 加藤周一「コンディヤックの『感覚論』に就いて」『加藤周一著作集』第1巻（平凡社、1979年）264頁。

⁷ 加藤周一（聞き手・江藤文夫）「戦時下のある風景」（鷲巣力編『「羊の歌」余聞』筑摩書房、2011年）180頁。

・太平洋戦争の開戦当日、加藤は「[ニュースによって変わることはないが] 弾丸や飢えは僕を変へるであらう。勇気が要るのもその時であらう」と書きとめている。戦争が自己の内面に及ぼす影響を冷静に観察しており、上記の認識もおそらく当時からのもの。

⑥「その頃ようやく……」

・《N・R・F》*La Nouvelle Revue Française* (新フランス評論) はアンドレ・ジッドらによって1909年に創刊、《ユーロップ》*Europe* はロマン・ロランらによって1923年に創刊。仏文研究室は1939年までこれらの雑誌を購読していた。「私は三〇年代のフランス文学の作品ばかりでなく、雑誌を拾い読みすることで、それらの作品の生み出された知的共同体の一般的な傾向を推察しようとしていた」⁸。これらの雑誌、とくに《ユーロップ》はファシズム批判が基調であった。

・『青春ノート』収録の「1941年」には、パリの陥落によって《N・R・F》が読めなくなったことを大事件として挙げ、「その余波たるやとおく極東の岸に及んで、n・r・f を読めなくなった我々の批評家は屢々幼稚な慷慨にその正体をばく露する」とある。

⑦「その「一六世紀」は、綿密周到に調べられていただけではない……」

・渡辺一夫の重要な業績は、(医師でもあった) フランソワ・ラブレーの研究であり、『ガルガンチュアとパンタグリユエル』の翻訳である。ラブレーが生きた時代は、人間のつくった思想・制度によって人間が使われた時代であるという点で戦時下日本と共通。

・ラブレーは、思想や制度が「もっと人間らしい」ものであることを求めた(ユマニスト)。同時代人のカルヴァンのように戦闘的ではなかったが、妥協的であったわけでは全くなく、諷刺を駆使して狂信を批判し続けた。

⑧「資料の周到な操作を通して……」

・「私は渡辺先生から何を習ったろうか。おそらく遠い国の文学を読むことによって私自身の周囲を見る見方を変えるような、そういう外国文学の読み方もあり得るということを読んだのだろう」⁹。そうした確信と蓄積があったからこそ、戦後間もない時期にフランス文学関係の著作を次々と発表した。

・「過去のなかに現在があらわれ、また同時に、現在のなかに過去が見えてくる」というのは、その後の加藤の日本文学史に対する態度でもある。

⑨「このおそろしく聡明で敏感な学者は」

・加藤は『真面目な冗談』のほか、『夕陽妄語』でもしばしば遊び心のある文章を書いたが、この点でも渡辺一夫を模範としているということか。

⁸ 加藤周一「フランスから遠く、しかし……」『「羊の歌」余聞』85頁。

⁹ 加藤周一「フランスから遠く、しかし……」『「羊の歌」余聞』84頁。

・ラシーヌ（1639-1699）はフランスを代表する悲劇作家。この時代のフランス演劇では舞台上で死や血を表現しないことが徹底され、主人公の死も後日談や告白のかたちで触れられる。加藤は雑種文化論のなかで、フランス文化が「純粋種」であることを説明するためにラシーヌを取り上げ、ゲーテ（ドイツ文化＝相対的な「雑種」の代表）と比較している¹⁰。

【第7パラグラフ】

私はまた、研究室で助手をしていた森有正・三宅徳嘉の二人とも相知るようになった。①その頃の森さんは、本郷のYMCAの一室に、積みあげた本と煙草の吸殻と埃と、洗濯を将来するはずの下着や靴下などの間に、埋れて暮らしていた。パスカルをフランス語で、カルヴァンをラテン語で読み、バッハのオルガン曲を弾いて、その間に、研究室ばかりでなく、YMCAのまえにあった「南米コーヒー」店でも談論風発していた。②そこには同じ頃YMCAに住んでいた劇作家の木下順二さんもあらわれたから、私は木下さんも知るようになった。③三宅君は、身体が小さく、痩せて、顔色がわるく、決して大声を出さず、また決して興奮せず、酒に途方もなく強くて、優しい少女のような心をもち、あらゆる事に関心を抱きながら、その知識の正確さと推論の綿密さで抜群の頭脳をもっていた。研究室に集って、議論を上下しているとき、黙って聞いていた三宅君が、「それ、一寸どうかな」と一言いうと、誰も喋るのをやめて、考えなおしたものだ。フランス語の解釈についても、統計の数字についても、歴史上の年代についても、調べてみて、三宅説の正しくないことはほとんどなかった。④戦争宣伝に「だまされ」ないという点でも、森有正・三宅徳嘉の二人の助手は、渡辺助教授に劣らず、頑固で、少しの妥協もしなかった。私は医学部から仏文研究室のなかへ一歩入ると、全く別の世界に入ったような気がした。

①「その頃の森さんは……」

・森有正（1911-1976）はフランス文学者。1938年に東京帝国大学仏文科を卒業し、当時は仏文科の副手（助手）。1951年に講和条約が発効すると、第1回のフランス政府給費留学生に採用され渡仏（『続羊の歌』『京都の庭』）。

②「そこには同じ頃YMCAに住んでいた劇作家の木下順二さんもあらわれたから……」

・1888年に設立された東京大学YMCA（キリスト教青年会）は自治寮（本郷追分会館）を備えており、森有正はそこで暮らしていた。有名な寮生としては吉野作造（政治学者）や片山哲（政治家）が挙げられる。

・劇作家・評論家として有名になる木下順二（1914-2006）も寮生のひとりで、加藤は「日本語を書く上で私が特別の注意を払ってきた作家が三人ある。その一人は鷗外、もう一人は中野重治、そして第三が木下順二である」と述べるほど木下の仕事に注目¹¹。

¹⁰ 加藤周一「日本文化の雑種性」『雑種文化』（講談社文庫、1974年）45頁。

¹¹ 加藤周一「木下順二小論」『加藤周一著作集』第6巻（平凡社、1978年）394頁。

③「三宅君は……」

・三宅徳嘉（1917-2003）はフランス文学者・語学者。1941年3月に東京帝国大学仏文科を卒業し、ついで大学院生となる。1943年10月からこの時期に新設された「特別研究生」に採用される。戦後まもなくコンディヤック『感覚論』を加藤と共訳しており（おそらく加藤が共訳をもちかけた）、三宅の語学力に対する加藤の信頼がうかがえる。

・『スタンダード仏和辞典』『ラルース仏和辞典』などの編纂で知られるが、存命中は一冊の単著も出さなかった。

④「戦争宣伝に「だまされ」ないという点でも……」

・敗戦後の加藤は、多くの知識人が「だまされた」「知らなかった」と弁明することに対し、実際は単に実態を知ろうとしなかったに過ぎないと激しく批判。「武者小路実篤〔中略〕は、敗戦後、戦争中をふり返って、「私はだまされていた」といった。そうかもしれない。しかし「だまされていた」のは、だまされていたとみずから望んだからである」¹²

【第8パラグラフ】

いくさの成りゆきは、①不幸にして、その後、私たちの考えの正しかったことを示すようになった。米国の加わった聯合軍は、欧州でドイツ軍を圧迫し、太平洋で日本軍の占領した島を取りかえしはじめた。②大学の卒業年限は短縮され、四月卒業が九月卒業になり、「学徒動員」が行われた。③私は医学部を卒業し、附属病院で働くことになったが、その後もながく、研究室自身が「疎開」したときまで、仏文研究室を折にふれて訪ねることだけはやめなかった。それはもはや仏文学のためではなくて、ただ嵐のなかで、誰かと話し合うことが必要だったからである。④破局はちかづき、私は自分自身が次第に追いつめられてゆくのを感じていた。

①「不幸にして……」

- ・敗北を願ったとすれば裏切りだが、という「内科教室」での討論を参照。
- ・「私たち」は加藤と渡辺一夫、森有正、三宅徳嘉（と、語られていないが川島武宜）。

②「大学の卒業年限は短縮され……」

・1941年から6か月在学年限が短縮され、4月入学・9月卒業に。また、同年にはそれまで課外活動の位置づけであった勤労奉仕（学徒動員）が正課となり、その期間は敗戦まで伸び続けた。1943年には文系学生の徴兵猶予停止＝学徒出陣が行われる。加藤を含む医学部の学生も、徴兵検査を受けている（ただし入営は延期）。

・「学徒動員」「疎開」と括弧がつけられているのは、それが現実（徴兵・徴用・避難）を美化する公定の言葉であるためか。

¹² 加藤周一「戦争と知識人」『加藤周一著作集』第7巻（平凡社、1979年）290頁。

③「私は医学部を卒業し、附属病院で……」

・1943年9月に加藤は医学部を卒業（6か月繰り上げ）。医学部附属病院の第二内科学教室（佐々内科）に配属され無給の副手（助手）に。1945年春に内科学教室は信州上田の結核療養所に「疎開」する。

・医学部で加藤は科学的研究の手ほどきを受けるが、戦争や政治について語り合えるような相手は見つけれなかった。

④「破局はちかづき……」

・戦局が悪化するにつれて軍医として召集されるものは増えていった。加藤は幸いにして召集されなかったが、同僚が次々と召集されていったので、内科科学教室の機能を維持することも徐々に難しくなっていった。

・1945年には本土決戦に向けた準備が進められ、「一億玉砕」が唱えられた。

【第9パラグラフ】

その頃三宅徳嘉君と私は、①神田教授の羅^{ラテン}旬語講読に出席することにしていた。その講義に出ていたのは、私たちの他に、学生が一人にすぎなかった。②軍事教練と「学徒動員」の時代に、古典語の母音の長短に関心をもつ学生は、さすがに少なくなっていたのだろう。大学の構内でも、本郷の通りでも、③「国民服」以外の服装をみかけることは、ほとんどなかった。しかし神田教授だけは、教室に英国製の背広であらわれた。その一分の際もない身なりで——それは誰の眼にも挑発的にみえたらう——御殿場の家から、その講義のために一週間に一度、汽車で、東京まで通って来ていたにちがいない。そのうちに、疎開がはじまり、汽車は混むようになり、④神田教授はこういつていた、「窓から出たり入ったり、こんなに汽車が混んでは本も読めません。これでは学問なんかできやしないよ」。それは独特の優しいおだやかな声であった。⑤私たちはまずキケロを読み——そこには「おお時代よ、おお、風俗よ」というあの有名な言葉もあった——その次にウェルギリウスを読んだ。一九四四年六月聯合軍のノルマンディー上陸のことが伝えられた日、神田教授はいつものように、ウェルギリウスを読み、ディドー（神田教授は、訳のなかで、その名まえを「ダイドウ」と英国風に発音した）の声の歎きを訳し終って、本を閉じ、帰る支度をしながら、「さあ、これで、敵も味方も大変だ」とほとんど独り言のように呟いた。そして起ちあがると、教室の扉のまえまで行き、急にたちどまって、私たちの方へふり向きながら、こういつた、「敵というのは、もちろん、ドイツのことですよ」。一瞬呆然として顔を見合せていた私たちが、我にかえったとき、神田教授の姿はもはやそこにはなかった。

①「神田教授の羅旬語講読」

・神田盾夫（1897－1986）は言語学者・聖書学者。イギリス・ドイツへの留学を経て、1932

年から東京帝国大学文学部言語学科でギリシア・ラテン語とその文学を教えた。

・神田は高木八尺（政治学者）の実弟であり、加藤にとっては母方の大叔父・岩村清一の妻（美須代）の兄であるから、遠い親戚にあたる。こうした関係に加え、少人数の、反時代的なラテン語講義に出席する加藤ら学生に対し、神田も親しみを覚えていたのかもしれない。

②「軍事教練と「学徒動員」の時代に……」

・加藤が軍事教練を受けた際の写真（右）¹³

裏面には、日付（1942年4月8日）と場所（習志野）、撮影者（M. Kawasaki）、「いやいやながら兵士を演じる役者の写真」という文言が書かれている。



写真7

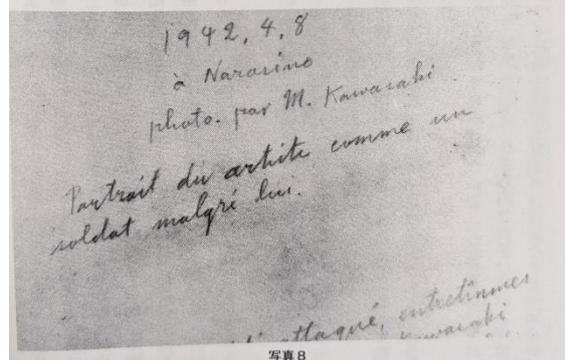


写真8

③「国民服」以外の服装をみかけることは……」

・国民服は、資源節約を目的とする1940年の「国民服令」によって制定された男子の服装。軍服と同じカーキ色（茶褐色）であり、軍人と一般人の違いを薄めることも狙いのひとつ。¹⁴

・あえて英国製の服を着て、ディドーを「ダイドウ」と英国風に発音するのは、自身が英国風の思考をもつことを暗示。



④「神田教授はこうっていた……」

・神田の人となり、学問姿勢。『高原好日』で加藤は片山敏彦について、戦時中でも片山は詩や音楽を話題にし、それ以外のことを話題にしなかったことを好意的に取り上げている。それはまた戦争に対する怒り——詩や音楽の世界を踏みにじるものへの怒りとも結びついていた。神田が「汽車が混んでいて本が読めない」と嘆くことへの注目は、片山への評価と一脈通じる。

⑤「私たちはまずキケロを読み……」

・キケロ（前106-前43）は古代ローマの政治家。雄弁家として知られる。「おお時代よ、おお風俗〔モラル〕よ」は元老院で行ったカティリーナ弾劾演説の一節で、古代ローマの頹廃を嘆いたもの。

¹³ 鷲巣力『「加藤周一」という生き方』（筑摩書房、2012年）126頁。

¹⁴ 画像は「文化遺産オンライン」より引用

<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/377617>

・ウェルギリウス（前 70－前 19）は古代ローマの詩人。代表作は叙事詩『アエネーイス』で、トロイアの王子アエネーイスが、トロイア王国の滅亡、カルタゴの女王ディドーとの悲恋を経てイタリアにたどり着き、ローマに新しい国を作るまでを描く。

・加藤は敗戦直後に「一九四五年のウェルギリウス」（1946年）で『アエネーイス』に描かれたトロイア王国の滅亡に触れている。「私は、一九四五年三月〔東京大空襲〕、暗澹たる絶望と恐怖との底で、『アエネーイス』の平易明快なラテン語と、その荘重な響きとを愛した。あの輝かしい比喩、あの華やかなイマージュ、あの運命を歌う朗らかな精神……。／しかし予言者カッサンドラの悲しい運命こそは、歴史に於ける理性の役割を、実に鮮やかに象徴するものであろう」¹⁵。「知識人の孤立」が敗戦後の加藤の問題意識であった。

¹⁵ 加藤周一「一九四五年のウェルギリウス」『加藤周一著作集』第8巻（平凡社、1979年）38頁。